

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月1日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520625

研究課題名（和文）デジタル時代の新しい剽窃の定義と英文ライティングにおける指導について

研究課題名（英文）On a new definition of plagiarism in the digital age and how to teach English citation rules and writing to Japanese college students

研究代表者

吉村 富美子 (YOSHIMURA FUMIKO)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：80310001

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、近年英語圏において「剽窃」および「他人の文章の借用」がどのようにとらえられているかを整理し、その理解に基づいて日本の大学において英文ライティング指導をどのように行うべきかについて理論的研究を行うことであった。この研究は、平成25年の6月に『英文ライティングと引用の作法—盗用と言われないための英文指導』というタイトルで研究社から出版される予定である。この本の中で、英語圏における引用と盗用（剽窃と同意）の考え方を紹介し、学生が盗用の指摘を受けないように日本の大学で英文指導をどう行うべきかを提案した。

研究成果の概要（英文）：The purposes of this research are 1) to review studies on plagiarism and textual borrowing conducted in English-speaking countries and 2) to propose how to teach English citation rules and writing to Japanese college students. The findings from this research will be published in a book entitled *Citation rules in English writing: Teaching students how to avoid plagiarism*, published by Kenkyusha, in June 2013. The book describes how citation rules and plagiarism have been perceived and discussed in English-speaking academic societies, and proposes ways to teach Japanese graduate and undergraduate students how to avoid plagiarism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：英語教育学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：剽窃、盗用、他人の文章の借用、英文ライティング、指導法、plagiarism, academic writing, scaffolding

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、日本においては盗用問題についての意識は高くなかったが、インターネット等の通信技術の発達で、「コピペ」(copy & paste)等の問題が意識されるようになって

いた。また、国際的な場で研究成果を発表することの重要性も認識され始めていた。研究社会において盗用の指摘を受けない論文を書くことの重要性が高まっていた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、近年英語圏において「剽窃」および「他人の文章の借用」がどのようにとらえられるようになってきたのかを整理し、その変化の中で日本の大学では英文ライティング指導をどのように行うべきかについて理論的研究を行うことであった。

## 3. 研究の方法

文献研究による。

## 4. 研究成果

研究成果は、英語圏における引用と盗用（剽窃と同意）の考え方や英語圏において盗用についてどのような研究や議論がなされてきたのかについて整理し、その中で盗用とはどういう問題なのかをまとめ、そのまとめに基づいて日本の大学における英語指導の在り方を提案することを、本の執筆と出版を通して行うことができたことである。

特に、日本人にとっては「表現の盗用」(language plagiarism)や「パッチワーク文」(patchwriting)の指摘を避けることは難しい。それは、これらは、英文を自分の言葉に言い換えることができない時に起こり、英語力が大きく関わる問題だからだ。日本人学生に英語力をつけさせることと、「表現の盗用」や「パッチワーク文」を避けることをバランスよく指導するための指導法をこの本の中で提案できたのではないかと考えている。

以下は、研究内容のまとめである。

### (1) 剽窃の定義と種類

「大学において、盗用とは書き手が故意に他人の言葉や考えやその他の（一般的な知識を除く）独創的なものを出典を示さないで使うことである」というのが一般的な盗用の定義である(WPA, 2003)。しかし、盗用は、次の表1のように様々な行為を指す。

表1 Howard (1995)による盗用の種類分け

盗用の種類	定義	Howardの提案する対処法
ごまかし (cheating)	他人が書いた文章を自分の文章として提出すること。	不正行為として罰則を与える。
出典無記載 (non-attribution)	他人の文章を引用する際に、正式な引用のルールに従っていないこと。	引用のルールを教えるなどの教育的指導を行う。
パッチワーク文 (patchwriting)	言い換えたり要約した部分が、原文と似すぎていること。	原文を理解していない時に起きるので、理解を助ける。原文を見ないで書かせ、最終原稿は原文と比べさせて、表現が似すぎている

ら変えるように指導する。

### (2) 英語圏における盗用の考え方の変化

英語圏においては、従来盗用は道徳心の問題だと考えられていたが、1990年代から主に学生の視点からの研究が行われ、表2にまとめられたように、盗用についての捉え方が変化していった。

表2 盗用の時代と文章の相互依存性の時代の盗用のとらえかたの比較

	盗用の時代	文章の相互依存性の時代
盗用のとらえ方	意図的なごまかし行為で、学習者の道徳心の欠如の問題。  犯罪という否定的な見方。  主に研究者や研究機関の視点。 問題の責任は学習者だけにある。  学習者の違反の問題。  学習者の発達段階は考慮しない。	ごまかし、出典無記載、パッチワーク文など、盗用の意図においても借用の程度においてもさまざまな行為が含まれる。道徳心の欠如ばかりが盗用の原因ではない。  盗用の種類により、犯罪や学習不足という否定的な見方と、学習ストラテジーになるという積極的な見方がある。  主に学習者の視点。  問題の責任は、学習者、教育者、教育機関にある。  学習者の違反の問題か学習過程や発達の問題。  学習者の発達段階を考慮する。
対処法	取り締まりを強化し、罰則を与える。	必要に応じて罰則も与えるが、事前・事後指導を行い学習者を教育する。
環境	紙の印刷物のみ。	紙の印刷物に加えて、ハイパーテキストやインターネット上の読み書きも含む。
文章のとらえかた	個人の知的財産。文章は個人によって創造される。  文章は、個人によって作られる。書き手の創造性は、自分の考えを自分の文章で表す部分に表れる。	社会全体の共有財産。文章は、他人の文章の影響を常に受けている。  文章は個人または共同で作られる。書き手の創造性は、自分の目的のために他人の文章をいかに利用するかを表れる。

### (3) 盗用とはどういう問題なのか

結局、盗用とはどういう問題なのかについては次のようにまとめることができる。

①研究とは、研究者が議論しながら、協力して知識を積み上げることで、「文章の相互依存性」(intertextuality)や「他人の言葉の借用」(appropriation)の考え方によれば、他人の研究から学び、その上に自分の研究を積み上げていく行為である。書き手は、他人の研究に対して敬意と謝辞を示し、その上に自分も新しい貢献をしなければならない。

②盗用は、引用のルール違反であり、研究社会に対する違反行為である。研究社会では、知識の正確性と正当性を担保する義務があるので、学術論文においてはどこからどこまでが誰の貢献かができるだけ明確になるように書くべきである。

③盗用が行われると、盗用を行った本人に対してだけでなく、研究社会全体への信頼が失われることになる。

④盗用にはさまざまな行為が含まれ、主に「ごまかし」「出典無記載」「パッチワーク文」に分類できる。パッチワーク文は言い換えが十分でないことで、出典を示していても不十分な言い換えは盗用とみなされる。

⑤言い換えとは、読んだ文献の文章表現を変えることではなく、その文章を個人としての自分がどのように理解したかを示すことであり、記述から具体的な状況を再構築し、それを自分の言葉で示すことである。従って、不十分な言い換えは、具体的な状況の理解を示し得ていないことが問題である。

⑥学生にとっての盗用は、研究者の盗用とは異質なものである。学生にとっての盗用は、学習の問題である場合も多い。学生の盗用を防止するためには、研究社会のものの見方や考え方を教えたり、英文の読み書きのしかたや引用のしかたを指導するなどの補助を行い、研究社会への移行を助ける必要がある。

⑦表現の盗用やパッチワーク文は、学習の一時的な措置としては有効である。これらは、学生の発達段階と文章作成のプロセスにおける初期の段階においては、学習ストラテジーとして活用させよう。ただし、学習者が成長すれば認められなくなることや、最終原稿にこれらが残ってはいけなことを教えておく必要がある。

⑧盗用の判定には、主に表現の重なりが用いられているが、最終的には、文中で他人の表

現がどのように使われたのかや書き手の事情を精査する必要があるのではないだろうか。

⑨適切な学習と盗用の境界線は、他人の文章をよく分析、理解し、そこから表現を小さなまとまりとして取り出して自分のものとする努力をし、自分の文中で自分の目的のために使い得るかどうかにあるのではないだろうか。

⑩適切な引用と盗用の境界線は、他人の文章を、その妥当性や信頼性も含めてよく理解し、自分の書く文章の目的との関係をよく考え、どこからどこまでが誰の貢献かができるだけ明確になるように書く努力をしているかどうかにあるのではないだろうか。

### (4) 日本の大学における指導について

「文章の相互依存性の時代」においては、私たちは他人から学び、その上に自分の貢献を積み上げることが大切だ。この認識に立つと、盗用とは他人から学んだものを自分のものにする努力や、他人の貢献を明示する努力が十分行われていないことを言うのではないか。英文ライティングの指導者は、学生たちに適切に他人から学び、他人と関わることを教えなければならない。

日本で英文ライティングを教える場合には、日本の大学特有の難しさも考慮する必要がある。日本人大学生の英語力と英文ライティング力は十分発達していない場合が多いし、文化的にも教育的背景を考慮しても、日本人大学生や大学院生にとって「表現の盗用」(Pennycook, 1996, p. 223)や「パッチワーク文」(Howard, 1995, p. 799)の指摘を免れることは難しい。

盗用の意味は、その文脈によって異なる。研究者にとっての盗用の意味と学生にとっての盗用の意味は違う。研究者でもある大学教員は、まずその違いを考慮しながら盗用問題を扱う必要がある。

日本人学生が英語力や英文ライティング力をつけようとする場合は、英文を読んでそこから学ぶ必要がある。他人の文章から学んだり借用したりするプロセスを経ずに英語力や英文ライティング力をつけることは不可能に近い。そこで、ジャンル・アプローチの「足場がけ」(scaffolding) (Bruner, as cited in Feez, 1998, p. 26)という考え方に基づいて、初めは他者から学ばせたり他者の補助に依存させながら徐々に力をつけさせ、力がついてきたら補助を少なくしながら自立を目指させるように指導するといいいのではないだろうか。

具体的には、大学院生と大学生の発達段階の違いや学習目的の違いを考慮すると以下

のような指導が考えられる。大学生には、まず基本的な英語力と英文ライティング力をつけさせ、引用のしかたや引用の考え方を教え、自分の言葉で書くように指導して、英語学習や英文ライティング学習を促すようにする。英語力や英文ライティング力をつけさせることが間接的に盗用防止につながる。大学院生には研究者としての責任感を教え、研究分野の論文の読み書きの力をつけてあげることと、盗用の中でも一番研究者に多いとされる「文章の盗用」(Roig, 2006)の指摘を受けないように、論文表現の言い換えのしかたを指導する。文章の盗用は、論文の内容をよく理解していないときに起きることが多いため、論文の内容理解を助け、その理解を英語で表現する練習をさせる。教室では、英文ライティング力をつけさせることと盗用防止のバランスを取ることが重要である。

#### 参考文献

- Council of Writing Program Administrators. (2003, January). Defining and avoiding plagiarism: The WPA statement on best practices. Retrieved from <http://wpacouncil.org/files/wpa-plagiarism-statement.pdf>
- Feez, S. (1998). *Text-based syllabus design*. Sydney, Australia: National Centre for English Language Teaching and Research, Macquarie University.
- Howard, R. M. (1995). Plagiarism, authorships, and the academic death penalty. *College English*, 57, 788-806.
- Pennycook, A. (1996). Borrowing others' words: Text, ownership, memory, and plagiarism. *TESOL Quarterly*, 30, 201-230.
- Roig, M. (2006). Avoiding plagiarism, self-plagiarism, and other questionable writing practices: A guide to ethical writing. Retrieved from <http://www.cse.msu.edu/~alexliu/plagiarism.pdf>

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ①Yoshimura, F. How plagiarism is perceived and handled in Japanese universities. *The JACET International Convention Proceedings: The JACET 51<sup>st</sup> International Convention*, 2012, pp. 359-362

〔学会発表〕(計1件)

- ①Yoshimura, F. How plagiarism is perceived and handled in Japanese universities. The JACET Convention 2012: The 51<sup>st</sup> International Convention, September 1, 2012, Aichi Prefectural University, Aichi, Japan.

〔図書〕(計1件)

- ①吉村富美子、研究社(株)、『英文ライティングと引用の作法—盗用と言われなかったための英文指導』165ページ

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

吉村 富美子 (YOSHIMURA FUMIKO)  
東北学院大学・文学部・教授  
研究者番号：80310001

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし